

正坊とクロ

新美南吉

青空文庫

一

村むらを興^{こうぎよう}行^{よう}して歩くサーカス団がありました。十人そこその軽業師^{かるわざし}と、年をとった黒くまと馬二とうだけの小さな団です。馬は舞台に出るほかに、つぎの土地へうつていくとき、赤いラシャの毛布などをきて、荷車をひくやくめをもしていました。

ある村へつきました。座員たちは、みんなで手わけして、たばこ屋の板かべや、お湯屋のかべに、赤や黄色ですった、きれいなビラをはって歩きました。村のおとなも子どもも、つよいインキのにおいのするそのビラをとりまいて、おまつりのようによろこびさわぎしました。

テントばりの小屋がかかってから、三日めのお昼すぎのことでした。見物席から、わあっという歓声^{かんせい}といっしょに、ぱちぱちと拍手の音がひびいてきました。すると、ダンスをおわったお千代^{ちよ}さんが、うすもいろのスカートをひらひらさせて、舞台うらへひきさがつてきました。つぎは、くまのクロが出る番になっていました。くまつかいの五郎が、ようかん色になったビロード^{うわぎ}の上着^{うわぎ}をつけ、長ぐつをはいて、シュツシュツとむちをならし

ながら、おりのそばへいきました。

「さあ、クロ公、出番だ。^{てはん}すっかりたのむよ」

と、わらいながらとびらをあげましたが、どうしたのか、クロはいつものように立ちあがってくるようが見えません。おやと思つて、五郎がごんでみますと、クロはからだじゅうあせだくになつて、目をつむり、齒をくいしばつて、ふといいきをつけているのです。「たいへんだ、団長さん。クロがはらいたをおこしたらしいです」

団長もほかの座員も、ドカドカとあつまつてきました。五郎は団長とふたりがかりで、竹の皮でくるんだ、黒い丸薬をのませようとしたましたが、クロはくいしばつた口からフウあわをふきふき、首をふりうごかして、どうしても口をひらきません。しばらくして、ピリピリッとおなかのあたりが波をうったと思ひますと、クロは四つんばいになつて、おりの中をこまのようにくるいまわりました。それから、わらのとくにドタリとたおれて、ふうツと大きくいきをふいて、目をショボショボさせています。

見物席のほうからは、つぎの出しものをさいそくする拍手の音が、パチパチひびいてきます。そこでとうとう、^{どうけやく}道化役の^{さきち}佐吉さんが、クロにかわつて、舞台に出ることにしました。そのとき、だれかが、

「正坊しょうぼうがいたら、薬をのむがなあ」

と、ためいきをつくようにいました。団長は、

「そうだ。お千代ちよ、正坊をつれてこい」

と、ふといだみ声でめいじました。お千代は馬を一とうひきだして、ダンスすがたのまま、ひらりとまたがると、白いたんぼ道を、となり村へむかってかけていきました。

二

正坊しょうぼうは初日しよにちのはしごのりで、足をひねってすじをつらせ、となり村の病院にはいつているのです。

正坊の病室のまどぎわには、あおぎりが葉っぱをひろげて、へやの中へ青いかげをなげいれていました。正坊は白いねまきのまま、ベッドの上にすわってあおぎりのみきは、ぞうの足みたいだなあと思いながら、ガラスのむこうをながめていました。すると、門のほうで、ひづめの音がしました。やがてだれかが、ろうかをつたわって、こちらへやってくるようです。ドアのむこうにお千代ちよさんの顔を見つけたすと、正坊はとびあがってよろこ

びました。

「ねえさん、ぼく、もうなおったよ。さつきもここで、とんぼがえりをうって見たの」

お千代さんは、いつも正坊を、ほんとうの弟のようにかわいがっているのです。

「へえ、早くなおってよかったわね。あのね、正ちゃん、たいへんなのよ。クロがはらいたをおこしちやって、お薬をのませようとしても、のまないの。みんなこまっているの。だから正ちゃんをよびにきたのよ」

「クロが？ ではぼく、かえる。もう、すっかりいいんだもの」

ふたりは院長さんにおゆるしをいただいて、いっしょに馬にのって、かえっていきしました。かんごふさんは、門の外へまで出て、見おくってくれました。

三

「クロ、ぼくだよ。クロ」

正坊しょうぼうは手のひらに丸薬をのせて、右手でかくく、クロの鼻のうえをなでさすりしました。クロはさつきよりは、いくらかおちついていましたが、でも目のいろは、まだとろり

とうるんで、生せい気いきがありません。ふうふういきをするたびに、鼻はなさきのわらくずが動きま
す。

正坊はふと思いついて、「ゆうかんなる水兵」の曲をウウウ、ウ、ウと、うたいだしま
した。

それは、いつも、正坊とクロが舞台に出ていくときの、たのしい曲なのです。クロは正
坊のうた声をきいて、しばらく耳をぴくぴくさせていましたが、やがてヒヨコリと立ちあ
がりました。正坊がすかさず、手のひらの丸薬を口の中へおしこむと、クロはぞうさなく、
ペロリとのみこみました。

こんなことがあつてから、正坊とクロは、まえよりもまたいつそう、はなれられないな
かよしになり、見物人からも、団の人気者にされました。

これも、やはり、ある村で興こう行ぎやうしていたときでした。いつも正坊やクロといっしょ
に出て、喜劇をする道化役どうけやくの佐吉さきちさんが、一座からぬけて、にげ出してしまったので、
そのかわりを、ふとつた団長がつとめることになりました。

「クロ、出る番だよ」

正坊はクロをおりの中から出すと、れいによつて鼻のうえをなですりながら、クロの

大すきなビスケットを、口の中へ入れてやりました。

舞台では留^{とめ}じいさんが「ゆうかんなる水兵」のラッパを、ならしはじめました。

ラロララ、ラララ、

ラロ、ラロ、ラ、

ラロララ、ラロラ、

ラロ、ラロラ、

ラロ、ラロ、ラロラ、

ラロ、ラロ、ラ。

正坊は、白い鳥のはねのついたぼうしをかぶり、金ピカのおもちやのけんをこしにつるして、將軍になりすまして、クロのせなかにのっかりました。クロはラッパの音に歩調をあわせて、元気よく舞台へ出ていきました。

「あらわれましたのは、ソコヌケ將軍に、愛馬クロにござーい」

留^{こうじよう}じいさんが口上をのべますと、正坊はクロのせなから、コロリとこころげ落ちてみせました。見物人はどつとわらって、手をたたきました。

「將軍はただいまから、盗^{とうぞく}賊たいじに出発のところでござーい」

クロが、あぁんと赤い口をあけました。將軍の正坊は、クロのせなかにまたがったまま、ポケットからビスケットをつかみ出して、口の中へいれてやりました。クロは正坊の手首までくわえてしまいました。正坊は目をパチクリさせて、またクロのせなから、落っこちてみせて、見物人をよろこばせました。

やがて賊にふんした団長が、銀紙ぎんがみをはったキラキラした大太刀おおだちをひつつかんで出てきました。正坊のソコヌケ將軍は、それを見ると、おどろいて、ブルブルふるえながら、劍けんをほうり出して、クロの首つ玉にしがみつきました。見物の子もたちが、またどつと声をあげてわらいました。

「いっらっ」

団長はつけひげをつけた、ひげだらけの顔に、するどくどがった目をむいて、身がまえをしました。クロはちらつと、団長のそのおそろしい顔を見ました。それは団長が、いつも正坊をおこりつけるときの顔でした。そこでクロはてつきり、団長がいつものように、ほんとおこつて、正坊を竹の刀でなぐりつけるのだと思いました。

「いっらっ」

団長はまた、刀をふりかぶりしました。と、クロは、ウオウツとひと声ほえるといっしょ

に、正坊のからだをかるがるとくわえて、あつといううちに、見物人の中をかけぬけて、テントの外へとび出してしまいました。これには見物人も団長も、留じいさんとめもあつけにとられてしまいました。正坊もびつくりしてしまいました。

やがて、テントの外の原っぱにおろされると、正坊は、クロの頭やせなかをやさしくなでまわして、なだめすかしました。そしてやっと、舞台へつれてかえると、まず見物席にむかつておわびをいい、賊のすがたの団長にあやまりました。見物人はかえって、やんやとはしやぎさわいでもうこびました。団長は舞台のうしろで、にがわらいをしていました。

四

小さなサーカスは、村むらをねつしんにうってまわりましたが、みいりはほんの、みんなが、かつかつたべていけるだけの、わずかなものでした。

そのうちに、一とうの馬が病気で死んでしまいました。「おいしいことをしたなあ」と、団長をはじめ、留じいさんとめもお千代さんちよも、正坊しょうぼうも五郎も、馬の死がいを取りまいてなげきました。

それからひと月もたったある朝、目をさましてみると、団長とお千代さんと、正坊の三人きりをのこして、ほかの軽業師かるわざしは、みんな小屋をにげ出していました。これではいいよ、興行こうぎやうすることができなくなりました。団長もしかたなく、わかれわかれになることに話をきめました。

クロはおりにいれたまま、車にゆられて、町の動物園に売られていきました。

正坊とお千代さんは、のこった一とうの馬と、テントやテーブルやいすなどを売りはらって、できたお金をもらいました。

「団長さんはなんにもなくなつて、どうするの」

と、正坊がたずねますと、団長はさびしそうにわらつて、

「なんにもなくなつて家を出たんだから、なんにもなくなつて家へかえるんだよ」

と、いいました。団長は、町の警察にたのんで、正坊とお千代さんを、メリヤス工場へすみこませてもらいました。

五

クロは町の動物園にかわれるようになってからは、まい日、力のない目で、青い空のほうばかりを見あげていました。正坊やお千代さんはどうしているんだろうなあ、もういちどあつて、あの「ゆうかんなる水兵」の曲がききたいなあ、そんなことを思いつづけてもいるようなかつこうでした。

おりの前には、まい日、いろんなきものをきたいろんな子どもたちが、立ちふさがりました。クロは、正坊やお千代さんが、もしかきているかもしれないと思って見まわしました。それは正坊だったら、赤と白のダンダラ服をきいているから、すぐわかると思つたからでした。ゆめのように、ぼんやりそんなことを思いつづけているとき、すぐ鼻のさきで「クロ」とよぶ、ききなれた声がひびきました。クロはものうい目をあげて、声のするほうをのぞきました。

ウウウウ、ウウウ、

ウウウウウ、

ウウウウ、ウウウ、

ウウウウウ、

と、正坊は「ゆうかんなる水兵」の曲をうなりだしました。クロはきゆうにからだじゆう

に、血がめぐりだしてきたように、いさましく立ちあがって、サーカスでしていたときのように、歩調をとっておりの中を歩きまわりました。それから、かなぼうの間から口を出して、なつかしそうに、正坊のほうをあおぎ見ました。ダンダラの服はきていませんでしたが、正坊にちがいないことがわかると、クロはウォーンウォーンと、のどをしぼるような、うれしなきのさけびをあげました。

正坊はにこにこしながら、ふくろからビスケットをつかみ出して、クロの口の中へ入れてやり、なんどもなんども鼻のうえをなでてやりました。

正坊のうしろでは、お千代が、なみだぐんだ目をして見ていました。ふたりは、はじめの定休日に、クロを見にきたのでした。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

初出：「赤い鳥 復刊第二巻第二号」

1931（昭和6）年8月号

入力：もりみつじゅんじ

校正：渥美浩子

1999年7月4日公開

2006年1月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

正坊とクロ

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>